

第3節 学会発表

1 石川県小児保健学会（第25回）

開催日：平成26年10月5日

開催地：石川県

発表方法：口頭発表

「赤ちゃんへの気持ち質問票」の活用について

○寺尾 知子、四方 雅代、竹本玲湖、伊川あけみ（石川県石川中央保健福祉センター）

【はじめに】

近年、母親の育児不安の増大や、深刻な児童虐待の増加が大きな問題となっている。母親が児との良好な愛着関係を築き、安心して育児を行うために、保健福祉センターでは市町や医療機関との連携のもと、母親の育児状況を早期にとらえて支援を行っている。当センターでの訪問指導の際には、母親に対するサポートを含めた育児環境の評価となる「育児支援チェックリスト」、抑うつ感や不安の評価となる「エジンバラ産後うつ病質問票（以下 EPDS）」、育児負担や赤ちゃんへの気持ちの評価となる「赤ちゃんへの気持ち質問票（通称：Bonding）」の3つの質問票を母親に記載してもらい、多方面からの支援に取り組んでいる。

そこで今回、当センターが実施した訪問事例について、3つの質問票の内容について集計し、特に「赤ちゃんへの気持ち質問票」を活用した今後の支援について検討を行ったので報告する。

【対象】

平成24年度に当センターで把握した、母親側や児側にリスク要因があるハイリスク妊産婦は292件あった。その中で当センターが訪問を実施した産婦56人（実人数）のうち、今回は3つの質問票の回答が得られた37人（実人数）を対象とした。37人の内訳は、母親側にリスク要因（精神疾患や若年等）がある母親22人、児側にリスク要因（未熟児、双胎等）がある母親22人で、7人はリスク要因が母親と児で重複していた。

【方法】

当センターにおける訪問指導の際に活用している3つの質問票を用いて把握した内容について集計、分析した。

「育児支援チェックリスト」は11項目で構成され、「はい・いいえ」の選択回答となっている。

「EPDS」は10項目の質問で構成され、各質問項目は0点から3点の4段階で評価した。合計9点以上であれば産後うつ病疑いと判断される。

「赤ちゃんへの気持ち質問票」は10項目で構成、0～3点の4段階で評価。今回は5点以上を高得点者とした。

【結果】

「赤ちゃんへの気持ち質問票」では、5点以上が10人（27.0%）で、最高点は7点、平均点は2.4点（SD±2.2）であった。高得点者10人を要因別にみると、10人中9人（90.0%）が母親側にリスク要因があった。「EPDS」では、9点以上が8人（21.6%）で、最高点は21点、平均点は7.1点（SD±5.7）であった。「育児支援チェックリスト」では、全体の94.6%にあたる35人が何らかの問題を感じており、経済的不安を感じる母親が37人中17人（45.9%）と最も多かった。

「赤ちゃんへの気持ち質問票」と「EPDS」との関連をみると、「EPDS」高値である母親は、「赤ちゃんへの気持ち質問票」においても得点が高い傾向が見られた。また、「EPDS」は8点以下であるが「赤ちゃんの気持ち質問票」が5点以上である母親は5人（13.5%）いた。

さらに、「赤ちゃんへの気持ち質問票」での高得点者について「育児支援チェックリスト」の回答をみると、「実母に相談できない」という項目で有意な差がみられた。その他、「夫や実母以外に相談できる人がいない」、「経済的不安がある」、「環境に不満」、「泣きの理由が分からない」、「児を叩きたくなる」という項目で4点以下の母親に比べて割合が高い傾向があった。

【考察】

「赤ちゃんへの気持ち質問票」では児に対する母親の気持ちを把握でき、「EPDS」や「育児支援チェックリスト」の同時活用で、児との愛着形成において支障となる原因を探ることができる。今回、産後うつ傾向の母親は児に対して否定的な感情を持ちやすいことが示唆されたが、「赤ちゃんへの気持ち質問票」では「EPDS」がそれほど高くない母親でも点数として表れる場合があり、児童虐待のリスク評価にもつながる。そのため「赤ちゃんへの気持ち質問票」高得点者の育児環境や背景についても丁寧に把握し母親に寄り添った支援が必要と考える。

今後は、フォローアップとして状況が改善しているかどうかの確認や、ハイリスク以外のケースとの比較についても検討したい。